

第63回 国民体育大会 柔道競技 東京都総合優勝 天皇杯第1位 皇后杯第9位

少年男子 第1位 (9/28~29) 4年ぶり10度目の優勝

2回戦 (1回戦はシード)

東京都				4 - 0	広島県	
先鋒	松木 武志	足立学園	×	引き分け	×	木戸 慎二
次鋒	登 成二	国土館高校	○	腕挫十字固		岩城 良佑
中堅	住谷 仁志	国土館高校	○	背負投		久保田 諒一
副将	岩尾 敬太	修徳学園	●	優勢勝ち		下和田 翔平
大将	上杉 亮太	国土館高校	○	支釣込足		宇都宮 光樹

準々決勝戦

東京都				2 - 0	宮崎県	
先鋒	松木 武志	足立学園	×	引き分け	×	志々目 徹
次鋒	登 成二	国土館高校	×	引き分け	×	大畑 侑介
中堅	住谷 仁志	国土館高校	×	引き分け	×	村岡 大潤
副将	岩尾 敬太	修徳学園	○	肩固		長友 大地
大将	上杉 亮太	国土館高校	○	崩上四方固		赤迫 健太

準決勝戦

東京都				4 - 0	栃木県	
先鋒	松木 武志	足立学園	○	横四方固		駒 柁 嵩大
次鋒	登 成二	国土館高校	○	横四方固		本原 廣宣
中堅	住谷 仁志	国土館高校	×	引き分け	×	北野 裕一
副将	岩尾 敬太	修徳学園	○	払腰		後藤 有輝
大将	上杉 亮太	国土館高校	○	横四方固		根本 惇平

決勝戦

東京都				代 - 0	神奈川県	
先鋒	松木 武志	足立学園	×	引き分け	×	高上 智史
次鋒	登 成二	国土館高校	×	引き分け	×	西山 雄希
中堅	住谷 仁志	国土館高校	×	引き分け	×	西山 大希
副将	岩尾 敬太	修徳学園	×	引き分け	×	高木 海帆
大将	上杉 亮太	国土館高校	×	引き分け	×	羽賀龍之介
代表戦	岩尾 敬太	修徳学園	⊖	優勢勝ち		高木 海帆

少年女子 (9/28)

2回戦 (1回戦はシード)

東京都				0 - 1	大阪府	
先鋒	三浦 理沙	渋谷教育学園	×	引き分け	×	淵原 千晶
中堅	唐鎌 千鶴	帝京高校	×	引き分け	×	平井 愛奈
大将	向後 圭実	淑徳高校		内股	○	山本 紗織

成年女子 第5位 (9/28)

1回戦

東京都				- 1	兵庫県	
先鋒	古杉 友美	警視庁	×	引き分け	×	垣田 恵利
中堅	佐藤 琴美	警視庁	○	横四方固		生田 茜
大将	加藤 有貴	国土館大学		優勢勝ち	●	堀江久美子

準々決勝戦

東京都				0 - 代	福岡県	
先鋒	古杉 友美	警視庁	×	引き分け	×	福岡 悠
中堅	佐藤 琴美	警視庁	×	引き分け	×	植木 順子
大将	加藤 有貴	国土館大学	×	引き分け	×	谷本 忍
代表戦	加藤 有貴	国土館大学		僅差	⊖	谷本 忍

成年男子 第1位 (9/29~30)

2年ぶり11度目の優勝

2回戦(1回戦はシード)

				東 京 都	3 - 0			宮崎県
先鋒	江種	辰明	警視庁	○	踵返			大久保省吾
次鋒	成田	泰嵩	アルゼ(株)	×	引き分け	×		千葉 大介
中堅	西山	将士	新日本製鐵(株)	×	引き分け	×		増淵 樹
副将	高井	洋平	旭化成(株)	○	内股			大鋸 新
大将	棟田	康幸	警視庁	○	支釣込足			松山 毅

3回戦

				東 京 都	4 - 1			静岡県
先鋒	江種	辰明	警視庁	○	背負投			漆畑 良
次鋒	成田	泰嵩	アルゼ(株)	○	優勢勝ち	●		日下 哲朗
中堅	西山	将士	新日本製鐵(株)	○	大外刈			小椋 俊彦
副将	高井	洋平	旭化成(株)	○	棄権勝ち			増田 圭省
大将	棟田	康幸	警視庁	○	合技			齊藤 和仁

準々決勝戦

				東 京 都	3 - 0			愛媛県
先鋒	江種	辰明	警視庁	⊖	優勢勝ち			浅見 喜尚
次鋒	成田	泰嵩	アルゼ(株)	×	引き分け	×		榎本 収
中堅	西山	将士	新日本製鐵(株)	×	引き分け	×		仲田 直樹
副将	高井	洋平	旭化成(株)	○	内股			清家 仁宏
大将	棟田	康幸	警視庁	○	崩上四方固			佐々田裕良

準決勝戦

				東 京 都	3 - 0			福岡県
先鋒	江種	辰明	警視庁	×	引き分け	×		室岡 雅典
次鋒	成田	泰嵩	アルゼ(株)	×	引き分け	×		浦 幸輝
中堅	西山	将士	新日本製鐵(株)	○	払腰			川波 達也
副将	高井	洋平	旭化成(株)	○	内股			後小路裕朗
大将	棟田	康幸	警視庁	○	横四方固			青山正次郎

決勝戦

				東 京 都	2 - 0			埼玉県
先鋒	江種	辰明	警視庁	×	引き分け	×		浅野 大輔
次鋒	成田	泰嵩	アルゼ(株)	⊖	優勢勝ち			江口 遼至
中堅	西山	将士	新日本製鐵(株)	×	引き分け	×		手塚 勝彦
副将	高井	洋平	旭化成(株)	○	内股			新井 信吾
大将	棟田	康幸	警視庁	×	引き分け	×		生田 秀和

少年男子

全員柔道で決勝に進出し、宿敵神奈川と対戦し代表戦の末、優勝しました。(4年ぶり)

今回一番の勝因は団結力であり、1回戦から失点なし。選手、監督、コーチ、皆の結束が勝利を生んだ。(岩淵公一)

少年女子

平成20年9月28日(日)から3日間の日程で大分県立総合体育館において第63回国民体育大会の柔道競技が行われ、各地区ブロック予選を勝ち抜いた都道府県代表チームによる熱戦が始まった。

初日に試合が実施される少年女子の部においては、18の都道府県が予選を勝ち抜き出場したが、今回の東京都少年女子チームのメンバーは、先鋒・三浦理沙(渋谷教育学園)、中堅・唐鎌千鶴(帝京高校)、大将・向後圭実(淑徳高校)の3選手とそれぞれの所属教員という布陣で臨んだ。選手それぞれが違う高校に所属している為チームワークという点で心配したが、練習以外にも行動を共にする機会を多く作り試合に向けての意識を高めていった。

初戦は大阪府で、夏のインターハイ78kg級第3位の山本選手を軸に、ベスト8の平井選手など、強豪に値するチームとの対戦であった。

先鋒、三浦選手対淵原選手(常翔学園)との対戦は、両者とも警戒しながらの攻防が続き、中盤に三浦選手が返してポイントを奪ったかに見えた場面もあったが、その後両者共に決めてなく引き分けに終わった。続く中堅戦は、東京チームのポイントゲッター唐鎌選手対平井選手(東大阪敬愛高校)との対戦で、両者組み手争いが厳しく続く展開で、唐鎌選手は果敢に攻撃を仕掛けるが、自分のパターンで柔道が出来ないまま引き分けに終わった。東京チームとしては中堅戦までに2対0もしくは1対0のリードで大將戦につなぎたかったが、両チーム0対0でむかえた大將戦は向後選手対、大阪チームのポイントゲッター山本選手(東大阪敬愛高校)の対戦で、前半は両者互角の攻防が続き、中盤には向後選手が攻撃する場面が多く見られたが、後半に入り、一瞬山本選手の組み手に制され、押し込まれた際、残り34秒を残し内股で跳ね上げられて一本負けを喫した。結果、東京少年女子チームは初戦において0対1で敗退した。

今回の試合前には、先鋒戦から攻撃柔道を展開し確実にポイントを奪うよう指示し、中堅戦で勝負を決める作戦であったが、その通りに展開出来なかったことが敗因と考えられる。東京都の少年女子は過去に二回優勝しているが、今回それには程遠い結果になってしまい大変責任を感じるが、東京都が少年男子及び成年男子の活躍により総合優勝を果たしたことは、大変喜ばしい限りである。来年度以降に向け少年女子柔道の強化を考えると、各校選手が今以上の努力を傾け、切磋琢磨することが三回目の優勝への課題ではないかと思う。

(木曾 博)

成年男子

本年の国体成年男子の競技は9月29日、30日に大分県立総合体育館で行われ2年ぶり

に優勝をすることができた。今大会は、江種、成田、西山、高井、棟田の世界選手権等の国際大会で大活躍している強化選手5名で望んだ。前評判から、「優勝して当たり前」と言われていたとおりの試合展開での圧勝と言ってよいのではないかと思う。

内容は、初戦での旭化成の選手を擁する宮崎県チームとの試合が鍵を握ると考えていたが、終わってみたら、3対0の楽勝で次の日の試合に、弾みをつけた。決勝戦当日は、静岡県、愛媛県、福岡県に失点1の圧勝で決勝に進出した。決勝は、埼玉県チームと行いこれも2対0の危なげない勝利を収めることができた。4年連続の総合優勝も手中にして、安堵の思いで帰京することができたのも、実力どうりの試合を展開してくれた選手と、当日、応援に駆けつけていただいた役員をはじめとする都柔連の皆様方のご声援の、おかげであると心から感謝お礼申し上げます。最後に、優勝を勝ち取った選手の日ごろの熱意と努力に敬意を表すと共に、今後、より一層の研鑽を重ね、ご活躍されることを熱望する。

(今村光志)

成年女子

成年女子は全国から地区予選を勝ち抜いた16チームが出場し熱戦を繰り広げた。我が東京チームは初戦を全日本2位の堀江を有する強豪兵庫県と対戦、厳しい戦いが予想された。内容は次の通り。

先鋒小杉は垣田と引き分け、中堅佐藤が生田に崩れ上四方固で一本勝ち、大将加藤が堀江に技ありのポイントを奪われ1対1となったものの辛くも内容差で勝ち、ベスト8に駒を進めた。準決勝進出を賭け対戦したのは愛知県を破り勝ち上がってきた福岡県。先鋒から大将まですべて引き分けとなり代表戦となった。福岡県とは昨年秋の秋田国体でも対戦しこの時も代表戦となり東京都が勝利している。東京都は加藤、福岡県は谷本が出場、共に決めてに欠けたが、判定は谷本へ上がる。

今回成年女子は第5位という結果に終わり目標としていた優勝に及ばなかった。

チームとして猛省しなければならないが、とりわけ失点を恐れるがゆえに積極性に欠けた事が挙げられる。強い気迫を持って挑む事が大切と痛感した。

すでに来年へ向けて戦いは始まっている。再び代表選手団として試合場に立ち、さらに、優勝という大輪の花を咲かせるよう一から叩きなおす覚悟である。

最後になりましたが今大会たくさんのご指導、ご声援を賜りました役員、先生の皆様方には心より厚く御礼を申し上げ、ご報告とさせていただきます。(矢嶋 明)



